

活用にあたっての留意点

この参考資料では、単元（レッスン）ごとに、3観点・4技能（5領域）すべてについて評価規準例を示しているが、1単元（レッスン）で必ずしも全ての観点・技能（領域）について評価するのではなく、単元ごとに指導と評価の重点を決め、年間を通してバランスよく、3観点・4技能（5領域）の指導と評価を行うよう計画することが重要である。

PANORAMA English Communication 2 では、各レッスンで、4技能5領域のうち1つに焦点を当てたターゲットタスクを設定している。日々の授業では、ターゲットタスクを視野に入れながら教科書本文を活用して4技能5領域を総合的に指導し、レッスンのまとめの段階では、ターゲットタスクを用いて一つの技能領域に焦点を当てた言語活動とその評価が行えるようになっている。

学習指導要領に示された英語コミュニケーションIIの領域別の目標と、PANORAMA 2 のターゲットタスクの対応はおおむね下の表のようになっており、各学校が作成する CAN-DO 形式の領域別学習到達目標の達成状況を評価する際にもこのタスクが活用できることを、本資料でも例示している。

英語コミュニケーションIIの領域別目標	PANORAMA 2 ターゲットタスク
<u>聞くこと</u> ア 日常的な話題についての話の展開や話し手の意図の把握 イ 社会的な話題についての概要・要点・詳細の把握	L4 科学に関するニュース（ヨウム対大学生の暗記力対戦）を聞いて情報を整理する L9 ディスカッション（イルカショーの是非）を聞いて主な論点を整理する
<u>読むこと</u> ア 日常的な話題についての文章の展開や書き手の意図の把握 イ 社会的な話題についての概要・要点・詳細の把握	L3 目的に合った商品を選ぶために広告の内容を読み取る L6 社会的な話題（難民問題）についての新聞記事を読んで情報を整理する
<u>話すこと【やり取り】</u> ア 日常的な話題について情報や考え、気持ちなどを詳しく話して伝え合うやり取りを続けること イ 社会的な話題について情報や考え、気持ちなどを論理性に注意して詳しく話して伝え合うこと <u>話すこと【発表】</u> ア 日常的な話題について情報や考え、気持ちなどを論理性に注意して詳しく話して伝えること イ 社会的な話題について情報や考え、気持ちなどを論理性に注意して詳しく話して伝えること	L1 自分の行きたい国とその理由についてやり取りする L10 相手の発言内容（環境保全）に基づき話し合いを深める L2 日本の文化について調べたことを発表する L8 未来のロボットについてプレゼンテーションをする
<u>書くこと</u> ア 日常的な話題について情報や考え、気持ちなどを論理性に注意して複数の段落から成る文章で詳しく書いて伝えること イ 社会的な話題について情報や考え、気持ちなどを論理性に注意して複数の段落から成る文章で詳しく書いて伝えること	L5 ディベート（電子書籍か紙の本か）の準備として自分の意見を論理的に書く L7 ソーシャルメディアの良い点・悪い点を事例とともに書く

■ 3 観点における指導と評価の考え方 (*)

(1) 知識・技能

外国語の音声や語彙、表現、文法、言語の働きなどについて理解を深め、目的・場面・状況に応じて適切に活用できる技能を身に付けさせ、その成果を評価する。聞いたり読んだりする際に、言語の使用場面と働きに注目して言語材料を学ばせることにより、話したり書いたりする際も、目的・場面・状況に応じた適切な言語使用ができるように指導する。日常の小テストや定期テストなどにおいても、単語レベルの暗記テストだけでなく、「こんな時には何と言うか（書くか）」という視点でテスト作成を心がけるとよい。

(2) 思考・判断・表現

コミュニケーションを行う目的や場面、状況などに応じて、日常的な話題や社会的な話題について、概要や要点、話し手や書き手の意図などを的確に理解したり、これらを活用して適切に表現したり伝え合ったりすることができる力を養い、その成果を評価する。知識・技能が言語使用の適切さに関する観点だとすれば、思考・判断・表現はコミュニケーションの内容の適切さを評価する視点だと言える。すなわち、聞くこと・読むことにおいては、話し手や書き手のメッセージや意図を的確に捉えているかを評価し、話すこと（やり取り／発表）・書くことにおいては、相手に伝えるメッセージや意図が、目的・場面・状況に照らして内容的に適切かどうかを評価する。したがって、特定の言語形式の使用ができているかを評価するのではなく、知識・技能を活用して問題を解決したり、課題を達成したりしているかを評価する。聞くこと・読むことのテストにおいては、概要・要点・詳細・意図の的確な把握を問う問題を出題したり、話すこと・書くことに関するテストにおいては、具体的な目的・場面・状況を設定した上で実際にやり取り、発表をさせたり、英文を書かせたりする必要がある。聞くこと・読むことのテストにおいては、教科書の内容を暗記しているかを問う問題にならないよう、教科書本文のリライト版や、同じ話題を扱った別の英文を用いるなどの工夫も必要であろう。

(3) 主体的に学習に取り組む態度

主体的、自律的に外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする態度を養い、その成果を評価する。主体的な取り組みについては、生徒が目的や場面、状況に応じてコミュニケーションを行おうとしているかどうかを、生徒が言語活動に取り組んでいる際に評価するので、いわゆる授業態度や、挙手の回数といった行動ではなく、聞くこと・読むこと・話すこと（やり取り／発表）・書くことの言語活動への取り組み状況を評価する。したがって本資料では、(2)の思考・判断・表現の評価基準の表現の語尾を変えた形の評価基準となっている。また、この観点にはもう1つ、自律的な学びを促進しそれを評価するという側面もある。これについては、単元・学期・年間を通して、学習の目標設定、学習方法の工夫、言語活動への取り組み、学習の振り返りの仕方などの指導を通し、自律的学習者としての成長が見いだされた場合に、主体的に学習に取り組む態度の学期や学年末の総括にプラスアルファの要素として評価に加味するなどの方法が考えられる。その際、たとえば振り返りシートの記述だけをもってプラスの評価を与えたりするのではなく、生徒の振り返りの結果が行動の変化として現れた点を記録し評価するなど、教師の恣意的な判断で評価しないようにすることが重要である。

(*) 詳しくは、国立教育政策研究所『「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料（高等学校 外国語）』（令和3年8月）をご参照いただきたい。

<https://www.nier.go.jp/kaihatsu/shidousiryou.html>